

中島川水辺の表情(十) イタチ路頭に迷う?

古屋 陸夫

中島川の最下流・江戸町あたりは海水と淡水が交じり合う所で、汽水域という。水の面の色は、川の色というより海の色が勝っており、対岸の南側は、オランダ商館跡地で観光地である。平成28年12月、この周辺は、市の再整備がおこなわれ、大工事中。バス通りを挟んで北側すぐ近くに、江戸町公園がある。

この公園でのこと、晴れた日には、園児たちが先生方に連れられてよくやってくる。駆けっこしたりなわとびしたり、それは可愛く賑やかだ。この公園・三方は県の庁舎に囲まれ、普段はひっそりとした趣である。



中島川の石橋
(撮影者：片岡勝義(全日本写真連盟会員・長崎歴史文化協会会員))

当方がある秋の午前10時頃、ひとりでベンチに掛けてみると、公園の樹上でバタバタという大きな珍しい羽音、それもすぐに止み、なんだろうときよろきよろしている、二羽のガラスが樹上のまわりで頻りに鳴きだした。おや、おやつとみていると、バタと落ちてきたガラスはすでに息絶えている様子。まわりで鳴いている二羽のガラスのうち一羽が、ツツと死んだガラスの羽根をつつき、あるいはくわえて引き摺ろうとする。このガラスはやや小ぶり、ガラスの子で、もう一羽のガラスは大ぶり、親でありましょう。この三羽はガラスの家族。親ガラスがこの子ガラスのつつく行為を怒り、やめなさい!と子をつつくのであった。

そして二羽は、周りの樹上にとまって、カアカアと、これまた哀切限らない声音で鳴くのだった。その間、50分。ガラスの送葬の儀に、死因はどうしたのかなという疑念のままに、奇しくも参列したのであった。この秋の日がさらにすすみ晩秋。

園児たちが5人立ち騒いでいる。なかには、棒状の枝を持った子が二人。聞いてみると、「猫の子だ、いや犬の子だ!」と園児も議論しだした。当方も気になり園児に交じってのぞいてみると、一匹の小動物が公園の隅っこに横たわっていた。死んでいる。小動物をのぞき込み、棒でつつく、さらにのぞく園児が増えてきた。これは先生もほうっておけない。先生も小動物をのぞきこみ、棒でつつく子どもたちに、「駄目、駄目!離れなさい、こっちにきなさい。」と。先生にもかけっこ、なわとびなどのカリキュラムがあるのです。先生がつぶやく「これはイタチじゃないですか」当方は初めて見るのでよくわからない。園児らが帰った後、つぶさに観察してみる。茶色でおおわれた大変キレイな毛並。体長80cm。胴体40cm、尻尾40cm。小顔で目は小さい、全体的にキレイでまだ若い感じ。やはり園児も気になるのである。カリキュラムから逃れ、棒を持って三度四度のぞきにくる、そのたびに先生駆けつけ、手を引いて連れもどす、イタチごっこである。

イタチは、現在大工事が進んでいる川辺あたりに住んでいたのではない。イタチ道といい、イタチの通る路を遮断すると、イタチは路頭に迷う、そう。この二つの死もナゾにつつまれている。どこの世界も死はもとをただせば、謎につつまれたものではないだろうか。

(九州文学同人・本会協力会員)

長崎の鋳物師

越中 哲也

― お盆の鉦 ―

七月二十三日は「飯香浦の地藏盆」、八月は「長崎の精霊流し」、共に昔ながらの何かさびしい双盤の音がきこえる。この双盤は長崎のどこで造られたのであろうかと私は先年来考えていた。

昭和二十八年謄写版刷りで渡辺庫輔先生が「長崎の鋳物師」という小冊子を執筆されている。其の後をうけて私も「続長崎の鋳物師」「キリシタン文化と聖福寺殿鉦」(純心大学博物館研究)を発表させて頂いた。

一五七一年、長崎開港当時に造られた初期六ヶ所に続いて開かれた町に博多町、金屋町、興善町……がある。金屋町は、やがて中島川の対岸に移って鍛冶屋町となっている。この金屋町が開けた頃、長崎の港には唐船・オランダ船の入港はなく、唯ポルトガル船の入港のみで現在の県庁の処にあったイエズス会の「岬の教会」を中心に街の人々は全てキリシタンであったので、金屋(町)で造られていた鋳物は教会や信者に必要なものであったと考えている。

二

一六〇〇年頃より長崎にも唐船が入港するようになって幕府の方針も変わり、街々に佛寺が創立されるようになり、中国より新しい鋳工の技が導入されてきた。茲に火災の難を避け金屋町は中島川の対岸に移り、本かじや町、新かじや町、今かじや町の三ヶ町が開けている。

長崎の代表的鋳物といえは大波止の鉄砲弾、崇福寺の大釜などであるが、精霊流しの双盤は「村田の鉦」と言って音が良く各町内の「もやい船」には、それぞれ自慢の「村田の鉦」があった。然し、多くは戦時中の金属回収の時に献納され現在では余り残っていない。

その村田氏は文政三年の唐寺興福寺新造の鐘名に「鋳匠村田孝助政勝」とあり、「長崎奉行所明細分限帳」にも「鋳物師 村田孝助 刃廿七才」と記してある。其の後村田氏は櫻馬場郷(町)に移ったと記してあり墓碑は光源寺墓域内にある。

風信

○長崎の七月と言えば廿三日夜より始まる、飯香浦の地藏盆のソーメン飾り(市指定無形文化財)がある。飯香浦には上下の地藏堂があり、上は太田尾地区が担当されている。廿三日の夜より上下地藏堂に初夜、中夜、後夜の念佛供養が始まり廿四日の朝まで続く。其の間にソーメン飾りがあり、ふくれ饅頭、人形薯のお接待を御受けした事がある。

○六月十三日 長崎歴史文化協会の平成二十九年役員会があり、小川会長の挨拶に続いて昨年度の行事報告、本年度の行事予定の発表、各理事からの報告。最後に新年度より役員として相談役に竹之下憲一郎氏、新理事として脇山壽子、大東良平の両氏に参加して頂く事になりました。

○一昨日、琴海町の木村忠氏より昨年同様、自宅で作られた楡柑と枇杷を多くさん頂戴しましたので、月曜長崎学出席の皆さんと美味しく頂きました。有難う御座いました。

○六月十七日 本会后援の第56回長崎キリシタン文化研究会を開催いたしました。盛会満席でした。

○今月各方面より御寄贈頂きました書籍

一、松尾龍之介氏より、自著の「鎖国の地球儀」。長崎の天文学者で「地球は球形である」と発表した西川如見の功績を述べられている。大いに参考になりました。(弘書房刊、二二〇〇円＋税)

一、長崎学創刊号 長崎市長崎学研究所刊(所長・土肥原弘久 木村直樹先生、本馬貞夫先生、織田勉先生等、長崎学に関する各種論考多し)。

一、長崎談叢 第百輯(長崎史談会刊 宮川雅一、原田博二、大田由紀、平岡隆二他各先生の研究発表あり。(非売品))

一、蒲池弘子氏より御長男の明弘氏が「火山で読み解く古事記の謎」を発売したので御持参下さった。明弘氏は読売新聞社に入社、退社後桃山堂を設立。神話や伝説が交差する歴史物語や秀吉伝説集成など多くを出版されている。(九二〇円＋税)

